日本経済新聞

自然の偉大さを作品に　画家と音楽家が語る原点

2014/12/19 6:30 | 日本経済新聞　電子版

スクリーンに映し出される満月や大海原。耳を澄ますと、虫の声や波の音が聞こえる――。そんな自然の風景が10月から１カ月間、日経東京本社（東京・大手町）のエントランスに現れた。作品を手掛けた画家のフランシス真悟氏と音楽家の内田学氏をゲストに迎え、キュレーターの児島やよい氏を司会役に、創作の原点を語ってもらった。（以下、敬称略）

枯山水サラウンディング「八水響」（2007年、東急多摩川線多摩川駅構内）
水流を人の流れに例え、一滴の水が川になり海に至るまでを実際に録音した水の音で表現。流域の古墳をかたどった黒い線上を人が通ると音が鳴る

枯山水サラウンディング「神曲」（2009年、在日フランス大使館旧庁舎「No Man's Land」展、東京都港区）
ダンテ「神曲」にインスピレーションを得て、「天国編」「煉獄編」「地獄編」と名付けた３作から成るサウンドインスタレーション

児島　今回、フランシスさんはエントランスの１階と２階にまたがるスクリーンに映像作品、２階のギャラリーに抽象画を展示しました。作品の前に立つと、内田さん率いる「枯山水サラウンディング」によるサウンド作品が聞こえます。お二人が参加した「Ｔｈｅ　Ｍｉｒｒｏｒ」展（10月16日～11月９日、名古屋商工会館、東京・銀座）と連動した展示です。まずはこれまでの活動を紹介いただけますか。

内田　私たち、枯山水サラウンディングは音楽家やプログラマー、デザイナーなど様々なクリエーターの集合体です。庭を作る感覚で音楽を作りたいと思い、「枯山水」の名を付けました。

代表作の１つ「八水響（はっすいきょう）」は東急電鉄多摩川駅の構内にある期間だけ設置し、音で多摩川の流れを表現した作品。黒い線のセンサー上を１人が通ると、水源の最初の一滴の音がポチャンと鳴る。人が多く行き交うと徐々に川のせせらぎに、さらに増えると海の波

音が響く。地元の人たちに「川」の存在を意識してほしかったんです。このように公共の場に音響作品を作っています。

フランシス真悟（ふらんしす・しんご）　アーティスト。1969年、米国カリフォルニア州生まれ。92年、クレアモント、ピッツァーカレッジにてBFA(美術学士号)取得。96年、キュレーション団体Hatch Artを設立、展覧会企画に携わる。「抽象と形態　何処までも顕れないもの」（2012年、DIC川村記念美術館、千葉）、「Kaleidoscope」（13年ロビーギャラリー、ダースト財団、ニューヨーク）ほか個展やグループ展に多数参加。現在ニューヨークと横浜を拠点に活動

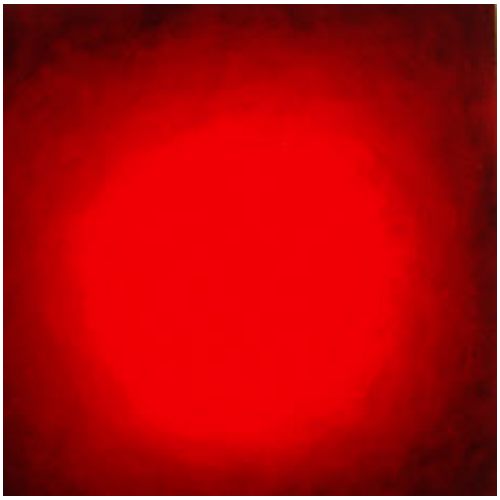
■絵で向き合った人生の変化

フランシス　私は具象画から絵を始めましたが、今は抽象画を描いています。初期の抽象画のテーマは「炎」でした。当時、人生の変化に関心があった。親しい人が亡くなったり、友人が離れていったり。その変化のシンボルが炎でした。私は若い時に父親を亡くしましたが、それも大きな変化でしたね。

　その後、今も続く青いコンポジションの絵画シリーズでは深い青色で意識と無意識、内面と外界との行き来を表しました。また、「Ｂｏｕｎｄ　ｆｏｒ　Ｅｔｅｒｎｉｔｙ（永遠へ）」という横長のドローイングでは、人が生まれて死ぬまでの感情やエネルギーの変化を様々な色の線で表しています。

児島　フランシスさんのお父様は20世紀を代表する抽象画家のサム・フランシス。創作の上で影響は受けましたか。

フランシス　あると思います。子供のころに父と一緒に絵を楽しく描いた記憶があります。大学は文学を専攻しましたが、イラストも描いていて。父からは「アートは大変な道だけど、やりたいならやりなさい」と言われた。彫刻や写真に進もうかと悩んだこともあるけど、色を使ってオリジナルイメージを描きたいという願望が強かったんです。父と比べられることもあるけど、どうやってもまねはできないものですね。



フランシス真悟「Veil (red)」（1999年）自分を燃やす「炎の幕（Veil）」をくぐり抜けて進んでいく、という人生観を表した

８メートルを超す大作「Bound for Eternity（永遠へ）」を制作中のフランシス氏。薄めたアクリル絵の具を重ね、複雑な色を出す

児島　なぜ、具象画から抽象画に路線変更したのですか。

フランシス　フィレンツェで伝統的な絵画技法を学び、画家のジョアン・ミッチェルに自分の絵を見せたのが大きなきっかけになりました。彼女から「あなたの絵には魂が入っていない」とはっきり言われた。それから、アトリエで彼女の絵を見せられて「私は人生を、魂を描いている。それをやらないでゴミみたいな絵を描いてもしょうがない。あなたは色彩のことをもっと知りなさい」と。

児島やよい（こじま・やよい）　インディペンデント・キュレーター、ライター。ナンジョウアンドアソシエイツ、横浜トリエンナーレ2001事務局を経てフリーランスに。「草間彌生　クサマトリックス」（04年、森美術館、東京）「高橋コレクション展　ネオテニー・ジャパン」等の展覧会を企画。著書に「わたしを変える"アートとファッション"　ークリエイティブの課外授業」（共著、PARCO出版）

■音で物語をつむぎ出す

児島　内田さんは創作の原点で、どんな体験がありましたか。

内田　僕も初めは文学を勉強し、小説家を目指していた。やはり文学の師からは厳しい言葉をもらったし、影響も受けましたね。その後、音を使って物語を作っていく方向へシフトしました。

　自然に対する描写は（アシスタントをしていた）ＹＭＯの細野晴臣さんの影響もあるし、他のジャンルの音楽からも影響を受けた。絵を描く時に色や材料を選ぶのと同じく、その時々でポップやロックなどの手法を選んでいます。特に自然の中にある音、いわゆるサウンドスケープと作曲した音を組み合わせるのが好きですね。

児島　フランシスさんは今回の展示で初めて映像作品を手掛けました。映し出すのはご自身の絵に影響を与えたという自然の風景ですね。

フランシス真悟「Bound　for　Eternity（Bloom）」ほか（2014年、日経東京本社）
内面世界を表した抽象画シリーズ。白い帯は自己の内面を示す

フランシス真悟「A　Moment　in　Time　and　Space」（2014年、日経東京本社）
米国カリフォルニアの雄大な自然風景を映し出す。２階から眺めると枯山水サラウンディングによる音楽が聞こえる

フランシス　はい。カリフォルニアで過ごした大学時代、よく友達と車で行った砂漠の広大な風景で、私が描く抽象画に影響を与えた原風景です。偉大な自然の中で自分の存在はちっぽけなものだと感じた体験が元になっています。仕事が忙しくても、短時間、身を置けば癒やされるような自然の景色を作品に表せたらいいなと。でも、難しいですね。カメラでただ撮るだけ

では思い描いた自然の姿は映せず、苦心しました。

■オフィスビルに描いた自然風景

内田　僕はそんなフランシスさんの絵画と映像との間をたゆたう音を作ろうと考えました。タイトルは「原因と結果の間をたゆたうエーテル」。エーテルとは今は実在しないと証明された想像上の物質。つまり、風景（原因）と抽象画（結果）の間をつなぐ目に見えない存在として、自然の音と人工的に作曲した音を組み合わせたサウンドを作りました。

児島　今回、初めてコラボレーションしていかがでしたか。

フランシス　内田さんとは色々な感覚を共有できたと感じています。枯山水サラウンディングの音楽を聞きながら絵を描いた時は、音がすうっと意識の裏から入ってきて、静かに集中して描けた。自然の音と人工的な音色が混ざって、展示した環境にも合っているなと思いました。

内田　確かに、フランシスさんとは考え方が似ていたかもしれない。普段、大手町のオフィスビルの中で大自然の景色を見ることはないけど、今回、一緒に展示したことで、この場でしか体験できない風景を生み出せたと思います。

内田学（うちだ・がく）　枯山水サラウンディング代表。元ＹＭＯ細野晴臣のレコーディングアシスタント等を経て、1996年“Why Sheep?”名義でファーストアルバムをリリース。リミックスや映画サントラ等を手がける。2007年、「枯山水サラウンディング」を設立し、クリエイティブディレクターに就任。主な作品に「八水響“octp/a/s”」（多摩川アートラインプロジェクト）、「音林浴」（港区立エコプラザ、東京）など

［10月29日のＮＩＫＫＥＩアート・プロジェクトセミナー2014・秋第１回「A Moment in Time and Space～自作を語る」の内容を再構成］

（構成　生活情報部　柳下朋子）

◎NIKKEI アート・プロジェクト
日経電子版では、現代アートの楽しみ方を提案するとともに、同時代のアーティストを側面支援する「NIKKEIアート・プロジェクト」を毎年実施しています。2014年秋は「Time to Time, Place to Place」をテーマに展覧会と関連セミナーを開きました。詳しくは、http://pr.nikkei.com/ART/

NIKKEI Copyright © 2015 Nikkei Inc. All rights reserved.

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。